月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.156



トワがバレンタインにピッタリな新衣装を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡 四つの運命

いつか会う起動者のために
オルディーネ頑張ります！

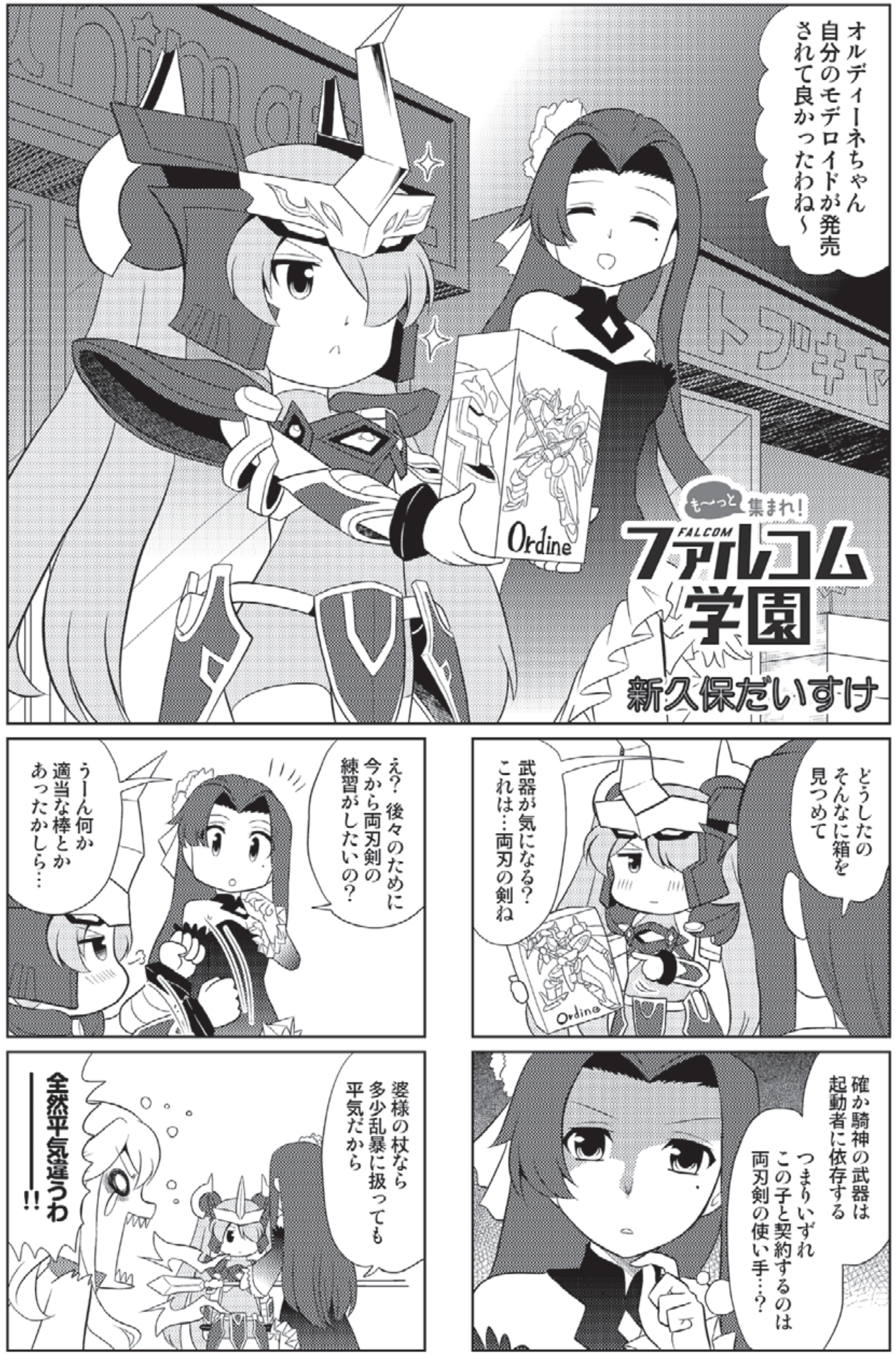
も〜っと集まれ！ファルコム学園



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

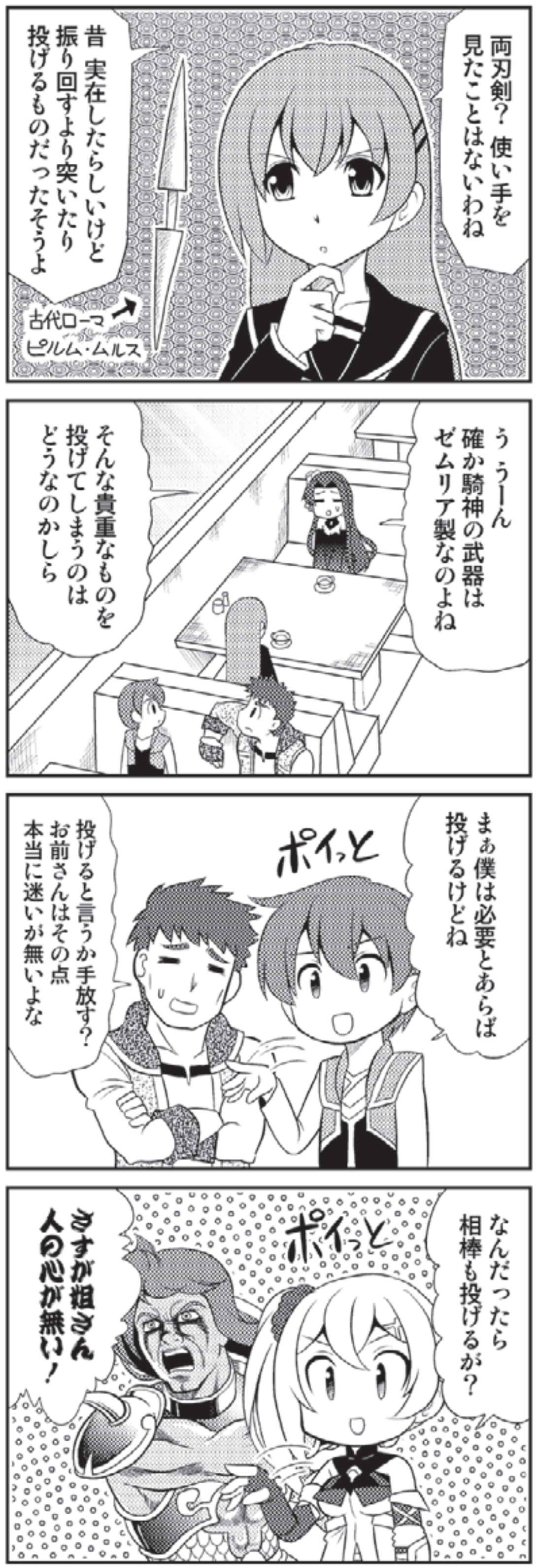
★自らのフィギュア化は全人類の夢★



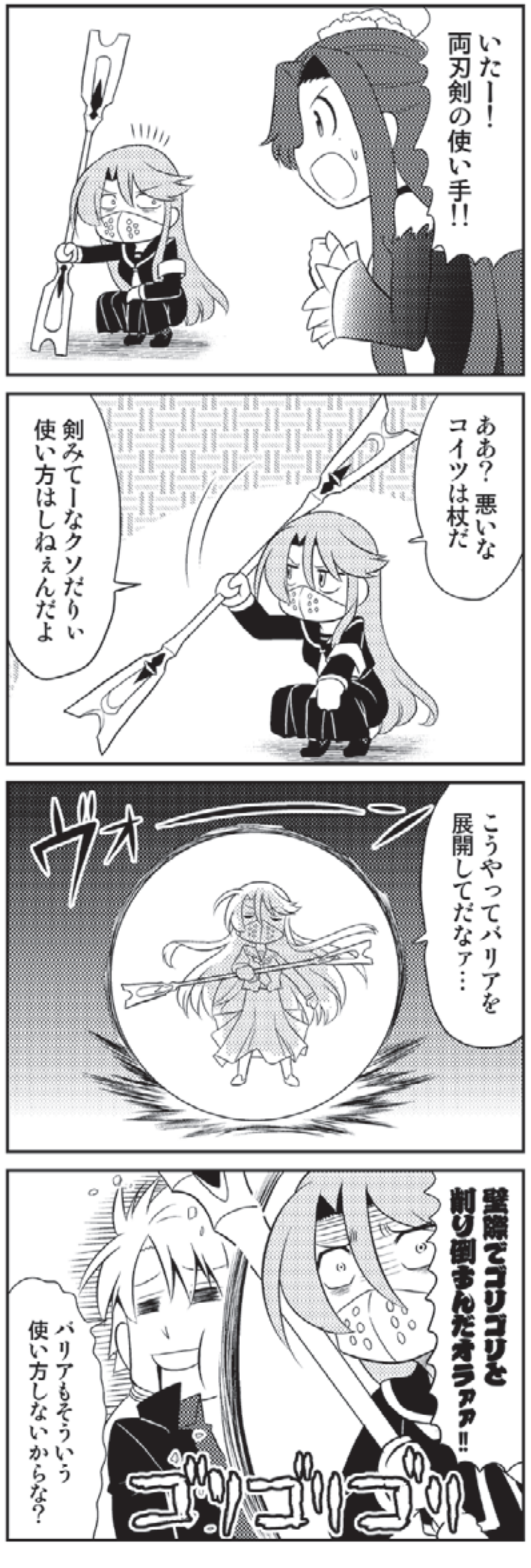
使い手を探して



無いもの



そういう使い方



異世界の楽しみ



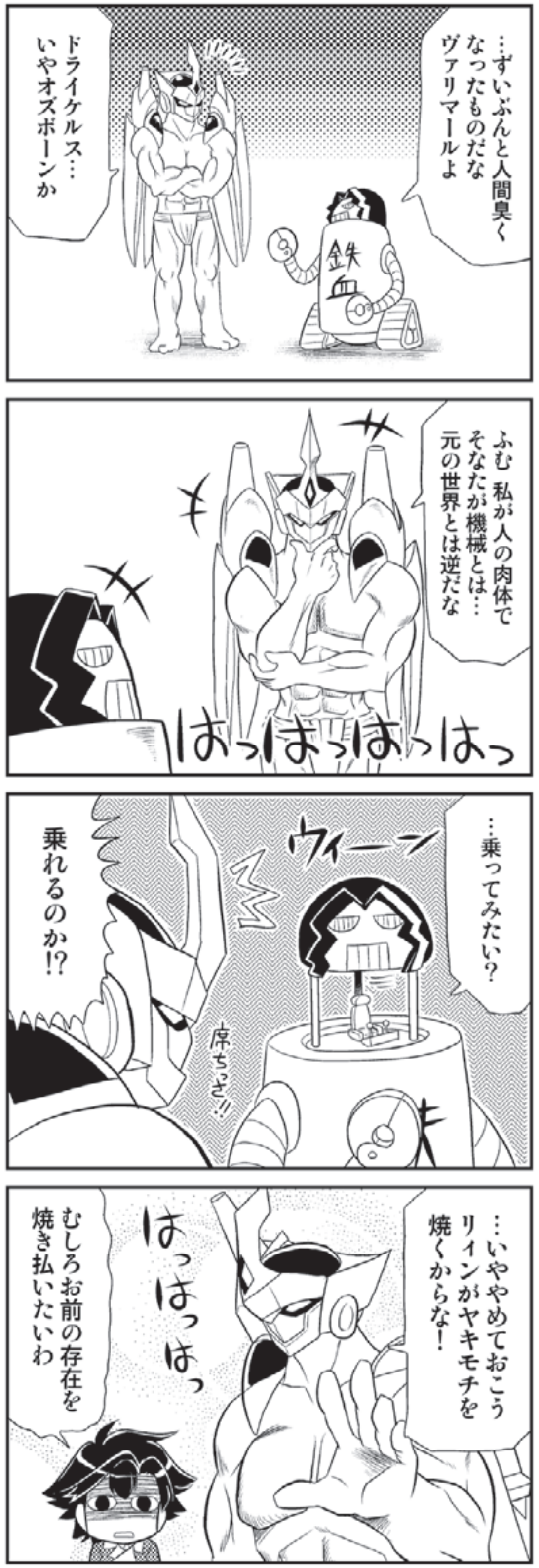
衝撃の新情報



生成の限界



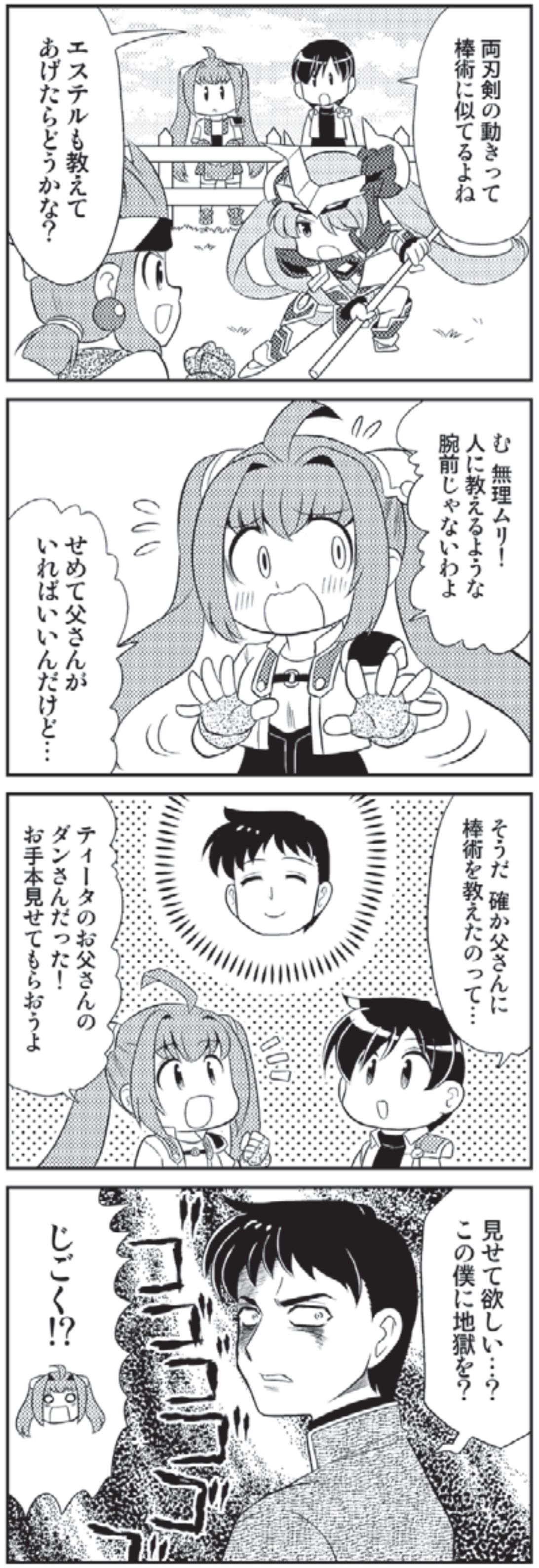
逆転する立場



教えてエルク先生



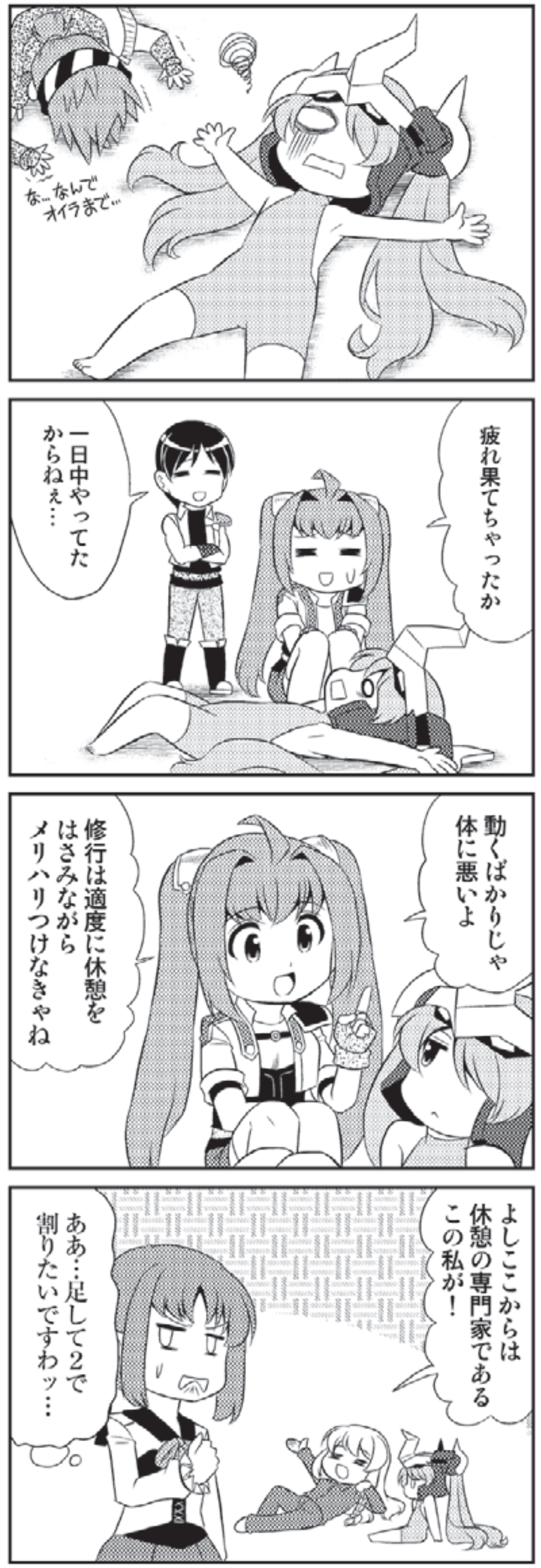
見せてください



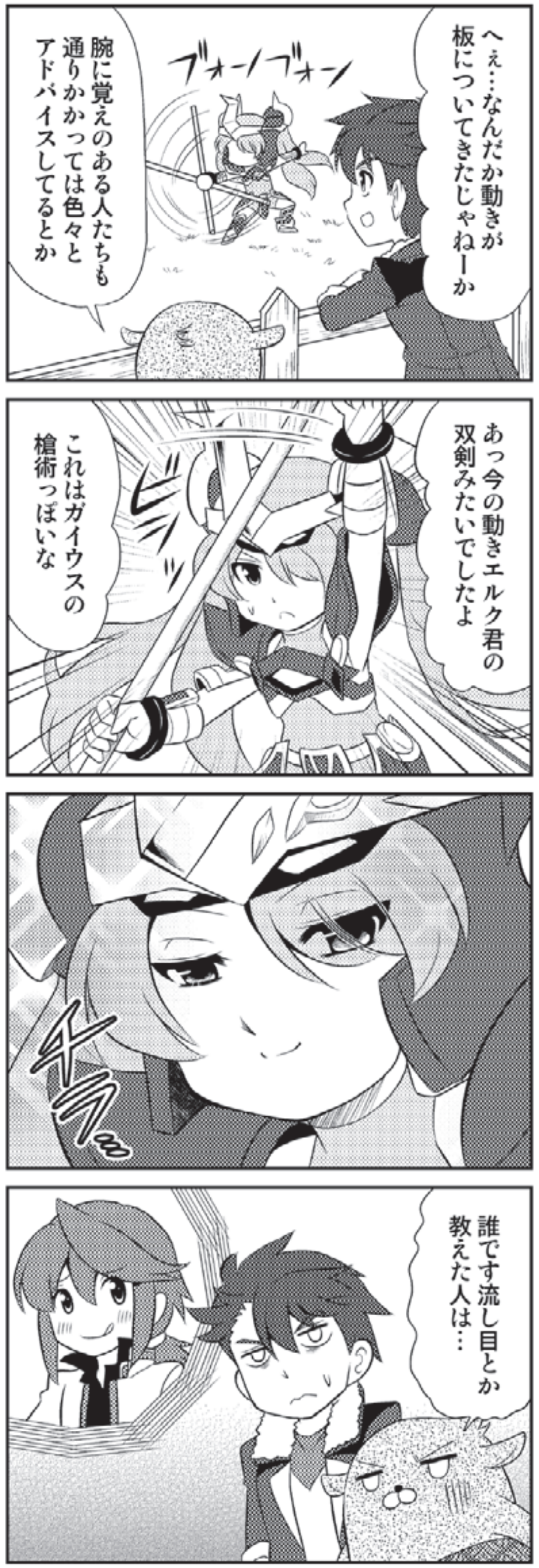
とばっちり



メリハリ



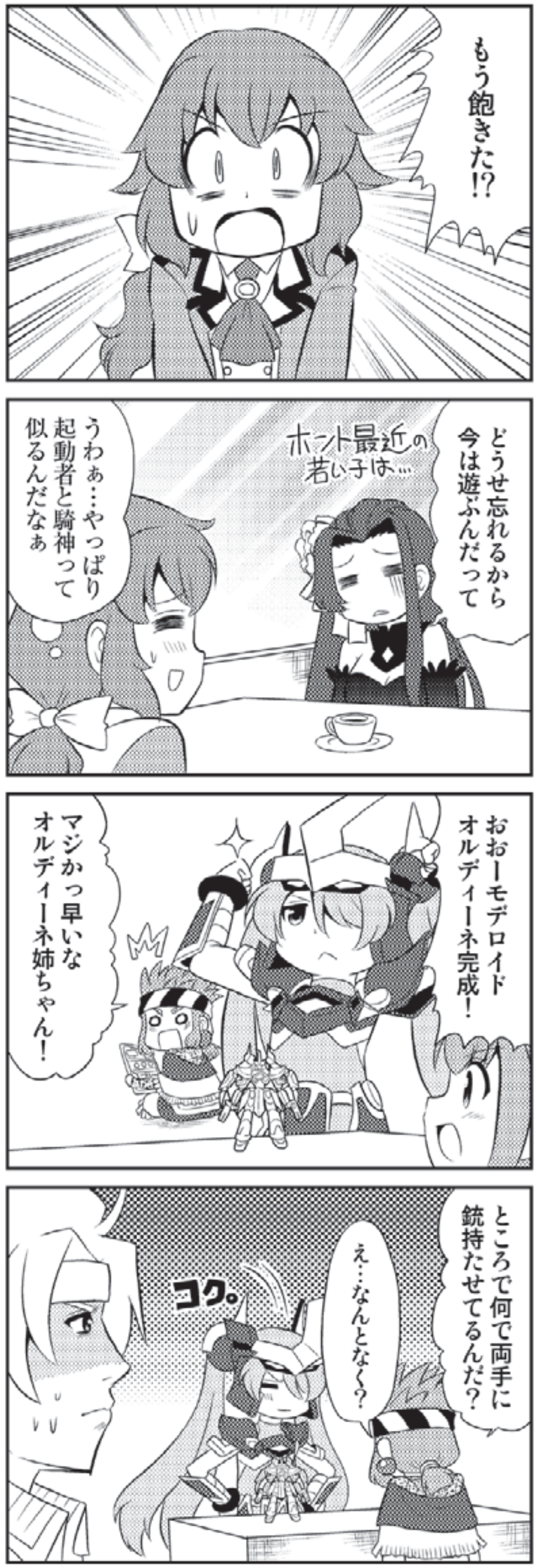
みんなのアドバイス



意識すべきもの



なんとなく似た者同士





◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks



発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「Falcom jdk BAND LIVE 2024」ライブグッズ通販開始！

「Falcom jdk BAND LIVE 2024」の物販アイテムがファルコムショップにて通販開始です。対象アイテムをご購入の方には、《東京公演》来場者限定トートバッグ（ナチュラル）を先着でお付け中。コスパさんや工画堂スタジオさんより販売されたグッズも各公式ショップにてお買い求めいただけます。特典は無くなり次第終了します。







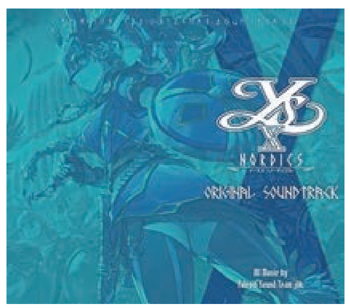


ファルコムショップ
https://falcom.shop/contents/jdk2024tote

物販アイテム情報
https://www.falcom.co.jp/archives/98926?utm_source=fmaga&utm_medium=email&utm_campaign=v240112

『イースX -NORDICS- オリジナルサントラ』好評発売中！

『イースX -NORDICS-』の劇中使用曲を完全収録したCD3枚組音楽アルバムが1月18日より好評発売中です。CD盤は初回生産分のみ、イラストカード11枚セットを封入した特製スリーブ仕様。さらに、ファルコムショップでお買い上 げの方には「たつぐるみアドル&たつぐるみカージャ」のアクリルフィギュアスタンドを同封。特典は無くなり次第終了します。








■価格：CD盤　3,400円（税抜）／DL版　2,917円（税抜）／単曲139円（税抜）／ハイレゾ版：3,148円（税抜）／単曲231円（税抜）
※定額音楽配信サービスでも楽曲提供中

商品ページ
https://falcom.shop/products/detail/597

全国5カ所で「イースX展」開催中！

「イースX -NORDICS-」の展示・物販などが期間限定で実施されます。各会場、期間中に「日本ファルコム」関連商品を3,000円（税込）ご購入･ご予約毎に「イースX」特製ステッカーをランダムで1枚プレゼント！
※絵柄はランダム配布となります。
※通販には特典は付きません。

■開催場所・期間：
ジーストア小倉　2024年1月27日（土）～2月4日（日）
ジーストア仙台　2024年2月10日（土）～2月18日（日）
■入場料：無料




特設サイト
https://www.geestore.com/event/gallery/ysx/

『イースX 盾の兄弟 推しくじ』販売開始！限定グッズをお見逃しなく！

バトルアクションシーンを描き下ろした「イースX 盾の兄弟推しくじ」を販売。AMOCAFE WEBSHOPでは推しくじコンプリートセットも販売中です。

■賞品ラインナップ

- A賞：アクリルフレームジオラマ（全1種）
- B賞：クッション（全1種）
- C賞：耐水強化性タペストリー（全2種）
- D賞：BIGアクリルスタンド（全2種）
- E賞：アクリルキーホルダー（全2種）
- F賞：ハードブロマイド（全2種）
- G賞：ミニキャラアクリルスタンドキーホルダー（全2種）
- H賞：カードステッカー（全4種）
- I賞：丸缶バッジ（全4種）
- 複数購入特典：ミニ色紙（全4種）

※複数購入特典／一度に10点購入時にランダムで1種



■販売期間：2月13日（火）23:59まで
■販売価格：1回770円（税込）
■発送地域：2024年3月下旬より順次出荷予定

販売ページ
https://oshikuji.jp/item/?id=ysx-tate

【コンプリートセット】
https://amocafe-shop.com/products/detail/2953

「英雄伝説 創の軌跡」ケープたぴぬい、ゆらゆらチャーム登場！

ふわふわのケープを被った「リィン」「アルティナ」の可愛いぬいぐるみ「ケープたぴぬい Vol.1」、キャラクターのお顔が揺れる「ロイド」「リィン」「ルーファス」の「ゆらゆらチャーム」の販売が決定！　お楽しみに♪



〈ケープ着用時〉　〈ケープ未着用時〉　〈ケープ着用時〉　〈ケープ未着用時〉



ロイド　リィン　ルーファス

■発売日：2024年6月上旬
■価格：3,300円（税込）

予約ページ
【ケープたぴぬい】https://tapioca.co.jp/products/detail/1177
【ゆらゆらチャーム】https://tapioca.co.jp/products/detail/1176

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
1 月は恒例イベント「ナハトの奮闘記」に「EX」が登場 !?
さらに、トワがキュートなバレンタイン姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式 X
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 EX.1 リース編」が実装！

エルフェンテック社による買収から龍老飯店を守るため、リースが大食い対決に参戦することに。
ナハトがサポートに奔走する中、対戦相手は次々と空き皿を重ねていく。
激闘の行方は果たして……！？



※このイベントは 1/31 に終了となります。

1月の 新／衣装替えキャラクターをチェック！

バレンタイン・トワ

白いブーツが印象的なトワのバレンタイン衣装。春を先取りした桜のモチーフや、ウサギのワンポイントがお洒落ながらもトワらしい可愛らしさを演出している。



『暁の軌跡』極秘資料館

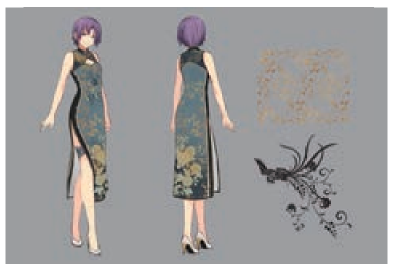
「バレンタイン・トワシャロン」衣装デザインラフ
（2024 年 1 月実装）



「晴着・エリィ」衣装デザインラフ
（2021 年 1 月実装）



「パーティー・アンゼリカ」衣装デザインラフ
（2021 年 1 月実装）



※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。



英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks



リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

第六章　抗争の疑惑

支援課ビルの一階にある台所は、夜だというのにずいぶんと賑やかだった。このさほど広くないスペースに、支援課の四人が集まっているからだ。
それぞれの手には、飲み物がある。ランディは、ブランデーをストレートで。ティオは、約束どおりロイドに作ってもらったココアのホイップクリームのせ。ロイドとエリィは紅茶。これは、ロイドがココアを作っている間にエリィが淹れたものである。
ランディとティオは台所にある小さなテーブルにもたれかかり、エリィとロイドはシンクの側に立って、おしゃべりに興じていた。
「ココアの良い香り……私も紅茶じゃなくて、ココアにすればよかったかも」
「エリィさん、ひと口飲みますか？」
ティオがココアの入ったマグカップを差し出すが、エリィは緩やかに首を振って断った。
「口の中で紅茶の味とまざっちゃうと、ちょっとね」
確かになぁ、とランディが軽く笑った。
「ま、ティオすけにはアルコールもカフェインも、まだ早いってな」
ほろ酔いの顔のランディを、ティオがジト目で見つめる。
「ランディさんのように醜態をさらすぐらいなら、一生アルコールは飲みません」
「し、醜態って……！」

思わぬ反論に驚くランディ。その様子を見て、エリィがクスクスと笑った。
「おいおい、お嬢まで笑うことねぇじゃんかよ」
「ふふっ、ごめんなさい。でも、私もお酒は嗜まないから、ティオちゃんとさほど変わらない意見ね」
エリィの言葉に、ランディは大げさに天を仰いだ。
「まったく、なんて嘆かわしい。人生に極上の彩りを添える、美酒の味を知らないなんて勿体ないっての！」
酔いのせいか、いつもよりアクションもオーバー気味だ。
「あら、味なら知っているわよ。お菓子の中に、お酒を使うものとかがあるじゃない」
「酒を使ったお菓子？」
「ええ。メジャーなところだと、チョコレートケーキの香りづけとか。あと、チョコレートの中にウイスキーが入っているものもあるわね」
エリィの説明に、感心したように膝を叩くランディ。
「チョコレートとウイスキーか。チョコが甘すぎなけりゃ、結構イケる組み合わせだな」
「香りを重視してる味つけだから、そんなに甘くないわ。言われてみれば、男性向けかもね」
いいねぇ、とのってくるランディ。興味津々といった様子だ。

「レミフェリア出身の有名なパティシエがやっているお店なのよ。以前、友人に連れて行ってもらったことがあるんだけど、みんなで、そこのお店に行くのもいいわね。ティオちゃん好みの甘いお菓子もあるし」
その言葉に、ティオも思わず目を輝かせる。
「……それはグッジョブな提案です」
「それじゃあ、今度のお休みにでも。ロイドもどう？」
「うん、いいんじゃないかな」
ロイドの答えを聞いて、ティオが「決まりですね」と言い、胸の前で手のひらをあわせた。喜ぶエリィたち。話は既に、どんなケーキがあるのか、またどれを買うかで盛り上がっている。
しかし、ロイドは内心、別のことを考えていた。
自分たちは、各人さまざまな経緯を経て、この特務支援課という名の下に集まった。いわば、寄り合い所帯だ。生まれも育ちも違えば、長けている能力も違う。
にも関わらず、自分たちはひとつの『チーム』として、結構まとまっているのではないか。ロイドは最近そう思うようになっていた。
お互いがお互いを尊重し、信頼する。言葉では簡単だが、実際にはプライドやら能力差などがあって、簡単にできるものではない。しかし、自分たちは自然とそれができるようになりつつある、と感じていた。
組み合わせの妙というやつだろうか。もしこれを狙ってメンバーを集めたとしたら、セルゲイ課長は相当の切れ者だな、とロイドは思った。
そして同時に、なんの経験もない自分がリーダーとしてなんとかやっていけているのは、彼らあってこそなのだ、そう認識した。
「じゃ、ロイドのおごりってことでひとつ。それでいいか？」
「ああ、うん。……って、なんでそうなるんだよ!?」
考え事で上の空だったのをランディに見抜かれていたらしい。突然話を振られ、つい生返事をしてしまった。
「ロイドさん、ありがとうございます」
すかさずティオが援護射撃を行う。こういう時は、仲間のチームワークの良さが恨めしい。
ちょっと、とたしなめるエリィの声を聞きながら、ロイドは改めて思った。
前言撤回。このメンバーのリーダーをやるのは、やっぱりそれなりに苦労が伴う。
龍老飯店は、クロスベル市街に店を構える東方料理の専門店である。火と油が命の東方料理は、使う食材・調味料・調理法すべてが豊富で、かなりのバリエーションを誇る。龍老飯店は

遠く東方から呼び寄せた料理人が腕を振るい、本場の味を提供していて、ファンも多い。
店内は広く、テーブル席とカウンターの両方を合わせれば、かなりの人数が収容できる。店内は東方風の飾りつけがされており、朱色がかった木材を基調としたカラーリングだ。クロスベル地方ではあまり見られない意匠のついたてが置かれている。テーブルは大きく、六人ほど座れるほどの大きさだ。テーブルの上には、さまざまな東方料理が並び、湯気を立てていた。香りをかいだだけで、食欲が湧いてくるほどだ。
そのテーブルに今、ロイドたち支援課の人間と、ひとりの女性が座っていた。年の頃は二十代半ばだろうか。グレーがかったベリーショートの髪には、ゴーグルがヘアバンドの代わりのようについている。くりっとした大きな目は、彼女の旺盛な好奇心を表しているかのようだ。服装は灰色のタートルネックに、カーキ色のショートコートを羽織っており、パンツルックと相まって活動的な印象を与えていた。
彼女の傍らには、写真を撮るためのオーバルカメラが置いてある。聡い人間なら、それだけで彼女の職業の予想がつくだろう。
グレイス・リン。それが彼女の名前である。仕事は、報道誌クロスベルタイムズの記者。クロスベルタイムズは、事件や社会問題への鋭い切り口と、体制への批判も辞さないという姿勢が多くのファンの心を掴んでいた。

クロスベルタイムズは何度か警察批判も行ってきた。現に、ロイドたち支援課の初任務となった『ジオフロント少年救出事件』でも取材に来て、遊撃士のアリオスにおいしいところを持っていかれたロイドたちを面白おかしくかき立てていた。両者の関係は良好とは言えず、どちらかというと悪い方だ。しかし今は、こうして同じテーブルを囲み、東方料理に舌鼓を打っている。
「どう？　なかなかイケるでしょ」
グレイスが、肘をついた両手の上にあごを乗せたポーズで言う。それに、エリィが素直にうなずいた。
「確かに美味しいです。かなり腕の立つコックがいるみたいですね」
その横に座るティオは、ひたすら口を動かしていた。口にしていた肉団子をごっくんと飲み込み、ふぅ、と恍惚の表情を浮かべる。
チャーハンを掻き込んでいたランディも、うんうんとうなずき、レンゲを置いた。
「しかし、こんな美味い料理に酒がないなんてありえねぇぜ。なぁロイド、せっかくのおごりだし、ちょっとぐらい良いだろ？」
ロイドに向かって猫なで声を上げるランディ。そんなランディにあきれた様子でロイドが答える。
「駄目だって。今は仕事中なんだから、ケジメはつけないと」

すげない言葉を聞いて、ランディは不満げだ。
「はいはい。ったく、ウチのリーダーは固いねぇ」
それまでもくもくと食べていたティオが、ぽつりとつぶやいた。
「ランディさんが柔らかすぎるのではないかと……」
エリィにまで同意されては、ランディは立つ瀬がなかった。
「そうね、さすがに仕事中にお酒はどうかと思うわ」
「おまえら……」
そんな彼らを見ていたグレイスが、ふふっと微笑んだ。
「面白いわね〜、あなたたち」
面白い？　と聞き返したランディに、うなずくグレイス。
「てんでバラバラな顔ぶれなのに、どこかまとまってる。なかなか良いチームみたいね」
そう言って、ニコニコと笑うグレイス。どうやらイヤミではなく、本心から言っているようだった。しかし、以前手痛い目にあっているロイドは、社交辞令としか受け取らなかった。
「それより、仕事の話をしましょう」
ロイドはなんとかイニシアチブを取ろうと、自ら話を振る。
ここには、仲良くご飯を食べに来たわけではない。捜査に行き詰まっていたロイドたちの前

に現れたグレイスに、情報の取引を持ちかけられたからだ。彼女は、ロイドたちに『欠けたパズルのピース』を提供する代わりに、そちらの持っている情報をもらう、と言っていた。このままでは埒があかないと判断したロイドは、この取引に応じることにしたのだ。
「さっきひと通り話しましたが、旧市街での事件は、不良グループのサーベルバイパーも、テスタメンツも、身に覚えがないとのことでした。お互いに相手がしかけてきた、そう考えているようです」
ロイドたちはグレイスに会う直前まで、サーベルバイパーとテスタメンツの本拠地に乗り込み、彼らに事情聴取をしていた。
といっても、一筋縄で話してくれる相手ではない。テスタメンツのリーダーであるワジにはさんざんからかわれ、サーベルバイパーのリーダー、ヴァルドに至っては、ロイドが彼にタイマン勝負を挑んで勝利し、ようやく話を聞き出した。
だが、このあたりのことを話して、クロスベルタイムズに面白おかしく書かれてはたまったものではない。あくまで事情聴取の結果聞き出した、という筋書きにして、真実は伏せていた。
「ふぅん。彼らが素直に聴取に応じるとはねぇ……どんな魔法(アーツ)を使ったことやら」
そう言いながらロイドを見てニヤリと笑う。どうやらグレイスは事情聴取でのやりとりを聞きたがっているようだ。ロイドはあわてて話を続けた。

「とにかく。あなたが持っている『欠けたパズルのピース』について、そろそろ話してくれませんか」
　身を乗り出して言うロイド。グレイスは、軽くしなを作って答えた。
「もし、イヤだ、って言ったら？」
　ロイドはいらだちを隠そうともせず、語気強く言った。
「グレイスさんのことを、今後一切信用しないだけです。お話をする機会も、今日で最後になるでしょうね」
　ロイドの様子を見てもなお、グレイスは口調を変えることはなかった。
「ウソウソ！　本気にしちゃやーよ。でも、その毅然としたところは結構いいわね〜。優しげなマスクとのギャップがなかなかそそるって言うか〜」
　ロイドはエリィたちの方を向き、さらりと言った。
「それじゃみんな、そろそろ捜査に戻ろうか」
　そう言って立ち上がるロイド。エリィとティオはそれに続いた。
「ええ、そうね」
「……ごちそうさまでした」
「ああん、冗談だってば〜。パズルのピースでしょ？　ちゃんと話してあげるから〜」

　脱力しながら席に座るロイドに向かって、ずっと席に座ったままのランディが笑う。
「ハハッ！　モテモテじゃん」
　そんなランディに向かって、ティオはいつものジト目を向けるが、ランディ自身は気づいていないようだった。
　居住まいを正したグレイスが、少し声のトーンを落として話を始める。
「あなたたち、『ルバーチェ』って知ってる？」
　その単語を聞いた瞬間、ロイドとエリィの顔に驚きが広がった。
「その名前は……」
　つぶやいて、その後の言葉を飲み込んでしまうエリィ。ランディとティオは、事情が分からないといった様子だ。
「なんだよ。ふたりとも、豆鉄砲喰らったような顔して」
　ティオは、ルバーチェ、という言葉をつぶやいて、何かを思い出したようだった。
「『ルバーチェ商会』……クロスベル市で認可された法人に、そんな名前があったような」
　ティオの言葉を聞いて、グレイスが微笑む。先程までの楽しげな雰囲気とは少し違う、押さえきれない好奇心があふれ出た表情だ。
「そう、表向きは認可された法人。だけどその実体は――」

弁士のように間を取り、ロイドたちを見回してから次の言葉を続ける。
「昔からクロスベルの裏社会を支配している『マフィア』よ」
今度は、ティオとランディが驚く番だった。
「なるほど……そういうのがいるって噂は聞いたことあるが」
ランディの言葉を受けて、ロイドが答える。
「クロスベルに住んでいたら、嫌でも耳にする名前だよ」
「さまざまなコネクションを持っている組織、という話を聞いたことがあるわ。有力者ともつながりがあるから、警察も簡単に手が出せない、とも」
エリィの言葉に、裏社会はどこもそんなもんか、とランディがつぶやく。ティオが話を戻そうと、グレイスに尋ねた。
「その『ルバーチェ』が、どうかしたんですか？」
グレイスは顔を近づけ、小声でしゃべる。
「最近『ルバーチェ』の構成員が妙な動きを見せているらしいのよ」
「妙な動き……ですか」
ティオの問いかけに、こくりとうなずくグレイス。
「何でか分からないけど、あちこち忙しそうに動き回ってるわ。それであたしも暇を見て、色々

調べてる最中ってわけ」
グレイスの言葉を聞いて、ロイドが腕組みをしてつぶやく。
「マフィアが忙しそうに動いている……」
どう考えても、よい予兆ではない。ロイドの表情に苦いものが走る。エリィはグレイスに、抱いていた疑問をぶつけた。
「貴女が旧市街に来ていたのも、もしかしてそれと関係が……？」
エリィの言葉に、グレイス以外の全員が驚く。言い当てられたグレイスは、微笑を浮かべながら肯定した。
「そういうこと。ある筋から聞いたんだけど、半月ほど前、マフィアの構成員が旧市街をうろついていたらしくてね。しかも、人目を避けるように質素な格好をしていたらしいのよ。……何かあると思わないかしら？」
最後の部分は、ロイドたちを見回しながらゆったりと言った。ランディとロイドは、目を合わせる。
「……匂うな」
「ああ、プンプンする」
エリィもうなずき、ふたりの言葉に賛同する。

「ほぼ同時刻に起こった、二件の闇討ち事件。ふたつの不良グループが同時に事件を起こすという、本来ありえない状況でしか説明がつかなかったけど、そこに新たな第三の容疑者が現れたわけね」
手詰まり感があった捜査に、一条の光が見えた。しかし、ティオが疑問を差し挟む。
「……でも、おかしいです」
その言葉に、みんなの視線が集中する。
「何故、マフィア組織が不良グループのメンバーをわざわざ闇討ちに……？」
「ああ、問題はそこだ。何らかの敵対関係があるなら、話は単純なんだけど……」
ロイドの言葉に、乗り出していた身をイスにもたれさせながら答えるグレイス。
「うーん、あたしの知る限り、そういったイザコザは今まで無かったんだけどね～。同じ暴力的なところはあっても、マフィアはプロだし、不良たちは所詮アマチュア……。利害が絡むわけでもないから対立する接点がないのよね～」
そこに関しての情報は、グレイスといえど持っていないらしい。暴力によって成り立つ組織は、普段からあちこちで暴力を振り回したりはしない。ここ一番、というところで振るってこそ効果があるし、味方も摩耗しない。アマチュアであるサーベルバイパーやテスタメンツでも知っていることだし、プロのマフィアであるルバーチェなら、なおさら理解している。利害が絡まない対立は、考えられなかった。
ふとランディが思いついたらしく、人差し指を立てながら話し始める。
「どちらかのグループが相手を潰すためにマフィアと手を組んだってのはどうだ？　その場合、自分とこの闇討ちは偽装ってことになるだろうが……」
自信がないのか、後半はややトーンダウンしていた。ランディの推理に、すかさずエリィとロイドが反論を試みる。
「うーん……そこまでやるかしら？」
「ああ、少なくとも、あのワジとヴァルドのふたりにそこまでの険悪さは無かったな。どちらかと言うと、何となくお互いを認め合ってるような……」
ロイドの言葉に、グレイスは軽く驚いた様子だった。
「あら、鋭いじゃない。あたしの知る限り、あのヴァルド君とワジ君はいいケンカ相手って感じなのよね」
やっぱり、という感じでロイドがうなずく。グレイスはそのまま話を続けた。
「元々、あの旧市街にいたのはヴァルド君の『サーベルバイパー』だけだったんだけど……そこに二年くらい前、あのワジ君がふらりと現れて『テスタメンツ』を結成したのよ。当然、ヴァルド君たちに絡まれて締め上げられそうになったんだけど……」

グレイスの表情がワクワクとしたものに変わる。あきらかに、誰かに結果を言い当てて欲しいようだった。
「……ひょっとして、返り討ち？」
ロイドが驚きながら尋ねる。ヴァルドとタイマン勝負をしたロイドにとって、あの優男風のワジがヴァルドを返り討ちにしたというのは、少し信じられないことだったからだ。そして、事実は小説よりも奇なり、だったらしい。
「そうそう、そうなのよ！　ワジ君、ああ見えて、格闘術をやってるみたいでね。目にも止まらぬパンチとキックで油断してたヴァルド君を叩きのめしちゃったらしいの！」
グレイスの野次馬根性丸出しな解説でも、ワジの強さは伝わった。ランディたちも驚きの表情をしていた。
「は～、あんなかわいい顔してそんなに強かったのかよ」
グレイスはおしゃべりをしながら、お皿にのっかっていた餃子をひとつ、口に放り込んだ。
「まあ、最初は油断しただけで、その後は何度かやり合ってほぼ互角の勝負みたいだけどね。でも、そういう経緯があるから、お互い認め合っているみたいよ」
「なるほど、ライバルと言うわけですか」
「そういうこと」

エリィの問いかけに答えつつ、皿の上に残っていた餃子をポイポイと口に放り込む。その健啖振りに若干あきれつつ、ランディが言った。
「となると、マフィアを利用して相手を潰そうって線はナシか」
ロイドはうなずいて、ランディの考えを肯定した。
「ふたりとも人望は厚そうだから、手下の暴走という線も考えなくていいだろう。う－ん、そうなると……」
考え込んだロイドの横顔を見て、グレイスは懐かしいものを見るような目をして、ふっと微笑んだ。彼女が見ていたのは、ロイド本人ではなく、その向こうにいる、誰かのようだった。
「――あたしとしたことが、サービスしすぎちゃったかな？」
グレイスのつぶやきにロイドが気づいた時には、彼女は既に席から立っていた。
「他の取材があるから、これで失礼させてもらうわ」
彼女は円卓の上にあったオーバルカメラと伝票をさっと掴むと、空いている方の手でひらひらと手を振った。
「ま、せいぜい頑張って、良い記事を書かせてちょうだい。おごり損ってことにならないようにしてね」
まったね～、と能天気な声を出して、グレイスは出口に向かって歩いていった。彼女が立ち

去るのを見とどけると、ロイドは、ふぅ、と肩で息をする。その様子を見て、エリィがクスリと笑った。
「ああいう人は苦手？」
「え、あぁいや、そういうわけじゃないけど……」
押しの強い人間、特に女性には、少し苦手意識を感じているロイドだった。捜査官としては、苦手なタイプの人間がいることはあまり好ましくないとは分かっているのだが、こればかりはどうしようもない。
「我が道を行くって感じの人だものね。でも、かなり情報が揃ってきたわ」
エリィの声も心なしか弾んでいる。ロイドは、真面目な顔でうなずいた。
「マフィアの話が聞けたのはかなり大きな収穫だった。問題は、どうして旧市街に介入しているかだけど……」
そこまで言って、ロイドはもう一度考えこむ。
「……難しいな。判断するには、情報が少なすぎる」
ティオがロイドの推理を捕捉すべく発言する。
「警察のデータベースでも見た覚えはありません……。セキュリティの高い場所に隠されているみたいですね」

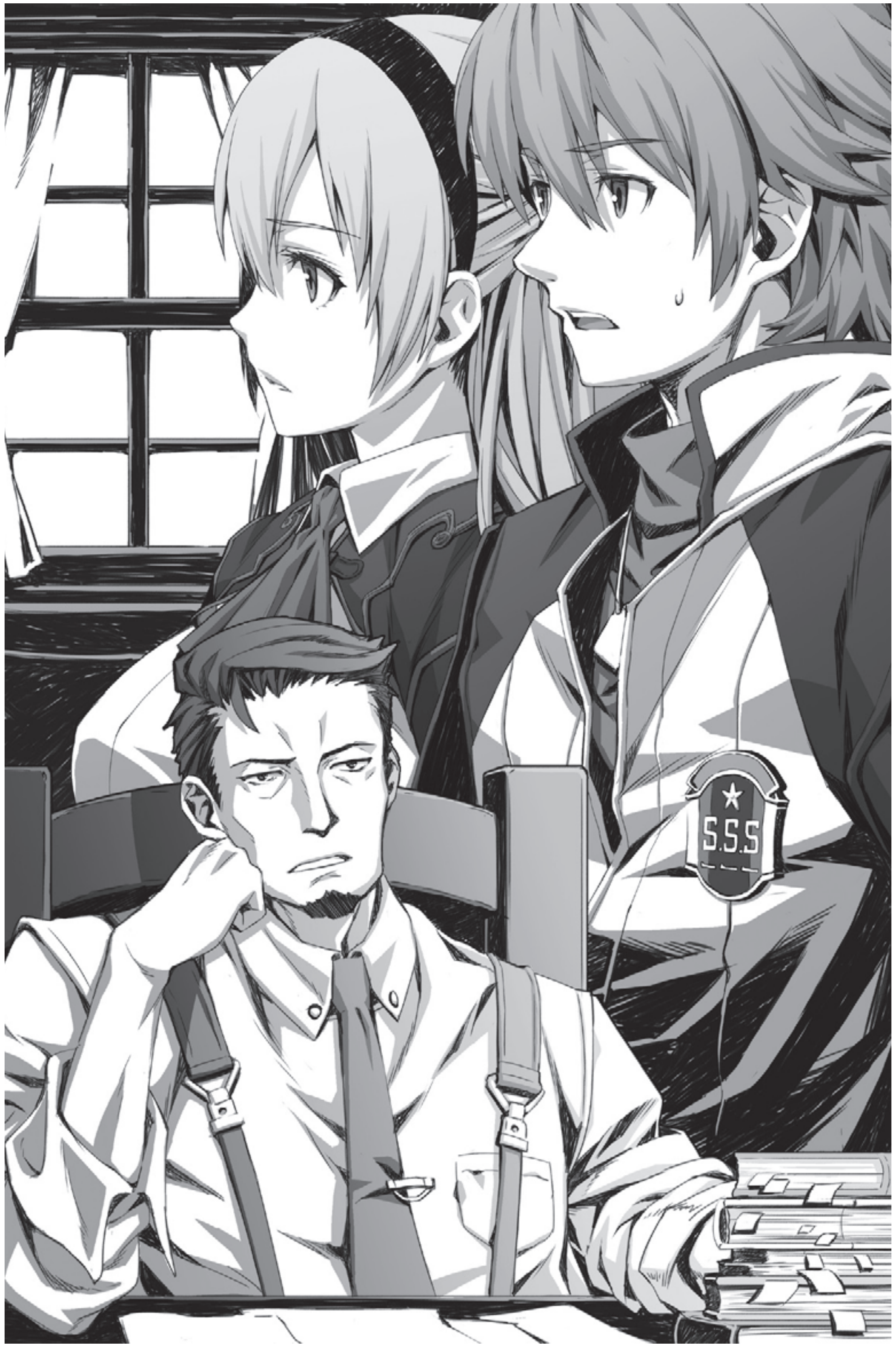
「機密情報ってか」
ランディの問いに、エリィが答える。
「その可能性は高そうね……彼らは『ルバーチェ』だから」
エリィの言葉には、言外に警察内部との癒着があるであろうことが含まれていた。そちらの線から情報を集めようにも、困難が予想される。ロイドはしばらく考えたあと、一度支援課へ戻ることを提案した。
「セルゲイ課長の判断を仰ぐ必要があると思う。なんとか自力で解決したかったけど、そうも言ってられないみたいだ」
ロイドの判断に、エリィたちはうなずいた。
「そんじゃ、とっとと戻って、オッサンを捕まえるとすっか」
ランディの号令で、ロイドたちは席を立った。

支援課ビル内にある課長室。セルゲイは普段から、ここに詰めている。
大きな窓が壁面につけられており、採光は良い。部屋の広さにはゆとりがあり、全体の半分も使ってはいない。だが、いざとなればここに支援課全員が集合することを考えれば、広すぎるということはないだろう。部屋の奥には大きな本棚がふたつあり、連結棚によってつながれ

ている。本の中身は警察関係の資料や法律関連の書物が大半を占めていた。
その本棚の前には大きなデスクが置かれている。しかし、いつも書類や本が山積みにされており、実質的に使えるスペースはあまり広くはない。セルゲイはデスクに備えつけのイスに足を組んで座り、資料に目を通していた。
コンコン、とノックの音がする。入れ、と答えると、ロイドを先頭に支援課メンバーの四人が入ってきた。セルゲイは資料から目を上げ、彼らを出迎える。
「不良共のケンカ、ちゃんと止めてきたのか？」
その言葉に、ロイドはなんとも言えない、といった表情を浮かべた。
「課長……それなんですが、少しやっかいなことになってきたかもしれません」
なんだ？　という顔のセルゲイに向かって、ロイドはこれまでの経過を報告した。不良グループはサーベルバイパーとテスタメンツという、旧市街で相争う二大勢力であること。彼らが反目し合うのは、同時に発生したという不可解な闇討ち事件がきっかけだということ。そしてそこに、第三の勢力として『ルバーチェ』が浮かび上がってきたこと。
特に、ルバーチェの名前を出した瞬間に、セルゲイの眼光が鋭く光ったことを、ロイドは見逃さなかった。
「……ふん、なるほどな」

それだけ言うと、セルゲイは押し黙ってしまった。普段からなにを考えているのか読みづらい顔だが、こういう時はまったく読めなくなってしまう。どのタイミングで声をかければいいものか、ロイドは分からなかった。さすがにそろそろ声をかけた方がいいか、と思ったその時。
「……そうだな。この件に関しては、おまえたちにすべて任せた」
唐突にそんなことを言われ、ロイドは面食らってしまった。それは、他の支援課のメンバーも同じようだった。エリィが真意を尋ねようとする。
「あの、それはどういう？」
「ここで引くも、さらに突っ込むも、判断は任せたって言ってるんだ」
捜査を指揮する課長職にあるまじき発言だった。さらに、セルゲイは続ける。
「『ルバーチェ』の件に関しても、おまえたちに教えることはない。全部、自分たちで調べてみろ」
判断を仰ぎつつ、新たな情報を入手できれば、と思っていたロイドのもくろみは早くも崩壊してしまった。
「そ、そんな無茶な……」
そんなことを思わず口にしたロイドに向かって、セルゲイは言い放った。
「……俺が止めろと言ったら、おまえらは納得できるのか？」
普段の飄々としたセルゲイの雰囲気とは違う、ずしりと重いトーンの言葉に、ロイドたちは

息を呑んだ。
「え……」
「マフィアの件に関しては、それだけ面倒くせぇ問題なんだ。もし俺が上司としてマトモな判断をするんだったら、止めろとしか言いようがない」
そこまで一気に言い、少し間を置いてセルゲイはロイドに問いかけた。
「それでいいのかよ？」
セルゲイの視線を真っ正面から受け止め、ロイドは考えた。確かにセルゲイに判断を仰ごうとは考えたが、捜査の中止を言い渡されることは、正直想定していなかった。しかも、『マフィアがらみはやっかいだ』という理由では。そして、実際に言われたとして、自分がどう答えるだろうかも考えた。答えはすぐに出た。
「……いえ」
ロイドの思いを代弁するかのように、ランディが続ける。
「ま、ここで打ち切りってのはさすがに後味が悪いかもな」
「そうね……色々と知ってしまったし」
「……同感です」
エリィやティオも同意する。三人は顔をあせて、気持ちを確かめあった。



「みんな……」
口にするまでもなく、自分と意識が共有できていることに、ロイドは喜びを感じていた。
そんな彼らのやりとりを見てセルゲイはニヤリと笑ったが、その笑顔は一瞬で隠してしまったので、ロイドたちは気づくはずもなかった。
「――まあ、そうだな。何も知らない小僧どもが足を滑らせて大ケガでもしたら寝覚めが悪ィしな。せめて良い助言者（アドバイザー）をおまえらに紹介してやろう」
セルゲイの言葉に、ロイドがきょとんとした表情を浮かべる。
「いい助言者、ですか」
そうだ、と言いながらセルゲイはイスから立ち上がる。散らかっているデスクの一角に置かれた名刺入れを手早く探し、目当てのものを見つけると、ロイドに向かってそれを差し出す。
ロイドはデスクごしにそれを受け取り確認する。どうやら名刺のようだった。
「『グリムウッド法律事務所』？」
どこか聞き覚えのある名前だな、とロイドは思った。
「西通りにある法律事務所だ。イアンって名前の弁護士先生がいる」
イアン、という名前を引き金にして、記憶が蘇ってくる。
「ああ……！　あのパン屋の裏手にある。そういえば俺も、前いた時、何度か挨拶くらいはし

てますね」
イアンの名前を聞いて思いだしたのは、ロイドだけではなく、エリィもだった。
「私も聞いたことがあります。確か、企業や貿易商などの法律相談をしている先生ですよね？」
「ってことは、大先生じゃねーの？　俺らと会ってくれるのか？」
ランディの問いかけに、エリィはにっこりと微笑んだ。
「大丈夫だと思うわ。そういう企業相手の仕事をこなす一方で、市民の法律相談にも親身に乗ってくれるって話だし」
エリィの言葉に、へぇ、と感心した声をあげるランディ。
「熊みたいな髭面だから、『熊ヒゲ先生』なんて呼ばれてる。あの先生なら、マフィアについてかなりの情報を持っているはずだ。ひょっとしたら……警察も知らない最新情報なんかもな」
セルゲイはこともなげに言ったが、ロイドたちは驚いてしまった。警察も知り得ない情報を、市井の弁護士が持っている。それだけで、その弁護士の凄さが分かるというものだ。
「いったい何者だよ、その先生は？」
「ま、会えば分かるさ」
ランディの呆れにも似た感嘆の声に、セルゲイはシンプルに答えた。
「前に俺が会ったときに、特務支援課のことは話している。おまえたちの身分を明かせば、話

ぐらいは聞いてくれるはずだ。この機会に挨拶しとけ」
ロイドは居住まいを正して答える。
「わ、分かりました」
そして、そのままエリィたちに向き直り言った。
「西通りならすぐ近くだ。さっそく行ってみよう」
了解！　という言葉と共に、彼らはロイドについていく。彼らが出ていくと、課長室は以前の静けさを取り戻した。
セルゲイはイスに座り直し、胸元のポケットからタバコを取り出す。手慣れた手つきでタバコに火をつけ、一服した。
『ルバーチェ』相手にどこまでやれるか、お手並み拝見させてもらうぞ」
若き支援課のメンバーたちに向かってそうつぶやき、セルゲイは一服を楽しんだ。
クロスベル市街、西通り。生活感あふれるこの通りにあるベーカリーカフェ《モルジュ》の裏手に、ロイドたちが目指す場所があった。
エリィが看板を指さす。
「グリムウッド法律事務所……うん、ここがそうみたいね」
ロイドが腕組みをしながら、少し考え込んだ様子で言った。

「それにしても、そのイアン先生という人は何度か見かけたことがあるけど……そんな偉い先生だなんて、思ってもみなかったな」
「ハハッ。ま、人は見かけによらないってね。この俺のように」
「ランディさんは、見た目どおりの人だと思います」
ランディの軽口に、律儀に突っ込むティオ。そのやりとりを見て、緊張していたロイドの心が少しほぐれた。
その時、法律事務所の木製のドアが開き、中からスーツ姿の男が出てきた。年の頃は二十代後半～三十代前半くらいだろうか。藍色のスーツをきっちりと着こなし、髪も整えられており、おまけに黒縁のメガネまでかけている。一見しただけでエリートであることが分かる風体だ。だが、知的な風貌に似合わず身体はかなり鍛えられており、上にスーツを着ていても分かるほどの肉づきの良さだ。
スーツの男は玄関先で、扉の向こうにいるであろう人物に頭を下げた。
「それでは先生、今後ともよろしくお願いします」
扉の向こうから、壮年の男の声がする。先生と呼ばれた人物だろうか。
「ああ、それはいいが……君たちのところは、もう少しなんとかならんのかね？　少しは市民の気持ちというものをだね……」

「市民の人気取りが仕事ではありませんので。それでは失礼します」
壮年の男の話をスーツの男が話を遮り、玄関先から立ち去る。そのまま、ロイドたちがいる方に向かって歩いてきた。男はロイドたちの姿を見つけると、軽く驚いたようだった。
「おまえたちは……」
見ず知らずの相手に驚かれ、ロイドは戸惑う。
「な、何か……？」
どう対処してよいのか分からず、多少しどろもどろな問いかけになってしまう。その様子を見てかどうかは分からないが、スーツの男はフッと鼻で笑った。
「なるほどな……セルゲイさんが飼い始めた仔犬どもというわけか」
意外な人物からセルゲイの話が出て、驚くロイドたち。よく見ると、男の胸元には、クロスベル警察の捜査官を示すバッジがついていた。
「そのバッジ……あなたもクロスベル警察の？」
しかし、男はフンと鼻を鳴らし、露骨な嫌悪感を表した。どうやら、ロイドたちと同じ組織であるとは認めたくないようだった。
「私のことはどうでもいい。それより、イアン先生を訪ねてきたようだが……」
そこまで言うと、ロイドの前に一歩出て、威圧的に見下ろす。

「くれぐれも余計な時間を取らせるんじゃないぞ。おまえたちのような役立たずと違って、色々と忙しい人だからな」
「なっ……!?」
役立たず、という言葉に色めき立つロイド。しかし、男は相手をするつもりはないらしく、そのままロイドたちの脇を抜けて、立ち去っていってしまった。
男が立ち去るのを見送ったあと、ロイドが声をあげる。
「な、なんだアイツは!?」
エリィは、男が立ち去ったあとを見つめながら答えた。
「どうやら本部の捜査官みたいだけど……」
「……居丈高な感じですね」
エリィが言いよどんだことを、ティオがずばり言う。だが、ランディは少し違う印象を持ったようだった。
「しかしあのメガネ、随分とやるみたいだったぞ」
やる、という言葉の意味が分からず、エリィがきょとんとする。ランディは自分の左脇をポンポンと叩きながら言った。
「左脇のところに、デカい得物を吊るしてたな」

きょとんとしていたエリィの顔が、驚きに変わる。それはロイドも同じだった。
「得物って、拳銃か？」
「他になにがあるんだよ」
「よく気づいたわね……」
しかしティオは、驚いた様子もなく言った。
「わたしもセンサーで感知しました。大型の軍用拳銃……といったところでしょうか」
ティオの発言を、ランディが肯定する。
「ああ、多分そうだろ。警察の支給品じゃ、あんなに膨らみはしない。それにあれだけ鍛えてりゃ、反動の大きな軍用拳銃だって使いこなせるんじゃねーの？」
ふたりの会話に、ロイドとエリィは感心しきりだ。エリィが素直な感想を述べる。
「ふたりとも、凄いわね……」
たまたま分かっただけさ、と笑いながら答えるランディ。
「それより、弁護士の先生を訪ねなくてもいいんですか？」
ティオの言葉で、一同はここに来た目的を思い出した。
「そうだな。忙しいところを悪いけど、挨拶させてもらおうか」
ロイドを先頭に、グリムウッド法律事務所のドアをくぐった。入ると、大きな室内全体を見



回せる開放感ある作りがまず目に飛び込んでくる。壁を設けず、ステップフロアによって応接スペースと仕事用スペースを分けているためだろう。

玄関を入ってすぐに応接スペースがあり、年代物のソファとテーブルセットが置かれている。観葉植物なども置かれ、相談に来た来客者をリラックスさせようという心遣いが感じられる。

ステップフロアはL字型となっており、応接スペースを囲むような構造だ。その一番奥、質素なデスクで、壮年の男性が何かの紙資料を読んでいた。年の頃は40代後半だろうか。少しでっぷりとした体躯を、白のYシャツと焦げ茶のズボンに押し込んでいる。ダークシアンのベストときっちりしめられた黄色いネクタイのおかげで多少かっちりした印象を与えるが、先程のスーツの男と違い、人を拒絶するような雰囲気はない。それは、男の顔に生えている立派な髭のせいだろう。あご髭と鼻下の髭、それにもみあげがつながり、なんとも愛嬌のある顔になっている。銀縁のメガネも人を威圧するような雰囲気はなく、年相応の落ち着きを感じさせるものとなっていた。

男は、ロイドたち来客に気づき、声をかけてきた。

「おや、忘れ物かね？」

先程のスーツの男が戻ってきたのかと勘違いしたようだ。すぐに見知らぬ相手だと気づき、態度を改め、営業用の声を出す。

「おっと、これは失礼した。グリムウッド法律事務所へようこそ。今日は何か相談事でも？」

「あ、いや……」

ロイドがどう話を切り出そうかと考えている間に、男はデスクを離れ、ロイドたちのいる応接スペースへと歩いてきた。

「いやいや。遠慮することはないよ。まだ若いようだが借金などで困ったことでも？　それとも仲間を集めて事業でも起こしたいのかね？　何でもいい、どーんと相談してくれたまえ」

ロイドに二の句を告げさせる間もなく、一気にまくし立てる。男のパワフルな一面が垣間見えるようだ、とランディなどは思った。

ティオが小声で、隣にいるエリィにささやく。

「この人が『熊ヒゲ先生』ですか……」

「噂どおりの方みたいね」

クスリと笑いながら、エリィが答えた。

戸惑っているロイドの顔を見つめていた男は、ふと何かに気づいたようで、眉根を寄せた。

「……おや？　よく見れば、君の顔……どこかで見たことがあるな。確かこのあたりに住んでいた子じゃなかったかね？」

「あはは……覚えてくれたみたいですね。三年くらい前に近くのアパルトメントで暮らして

いました」
ようやく話すきっかけができてひと息ついたロイドが答える。そして、姿勢を正して自己紹介をした。
「改めまして——ロイド・バニングスといいます」
男は笑顔で答えたが、バニングスという名前を聞き、また何かを思い出したようだった。
「おお、そうか。道理で見覚えがあると——」
「ん？　バニングス……!?　ひょっとして……ガイ・バニングスの弟さんか？」
思わぬところで兄の名前が出てきたに驚きつつ、ロイドが答える。
「あ……はい。ひょっとして、兄のこともご存知だったんですか？」
「ご存じもなにも……」
そこまで言い、男は遠くを見るような目でロイドを見つめた。あきらかにロイドではなく、その向こうにいるガイを見ている視線だった。少し居心地が悪いのか、ロイドが戸惑いつつ、仲間たちの方を振り返る。男はそこではじめて、ロイドが着ているジャケットの背中にあるクロスベル警察の紋章に気づいたようだった。
「……ふむ、どうやら事情があって来たようだね。こんな所で立ち話もなんだ。ソファにかけたまえ」
応接セットへロイドたちを促しつつ、大きな体躯を揺らし、ドタドタとステップフロアを上っていく。
「あいにくコーヒーしかないのだが、それでかまわないかね？」
「あ、お構いなく」
ロイドが声をかけた頃には、すでに男はカップを並べ、ポットに入ったコーヒーを注いでいた。ランディがソファに腰掛けながら、エリィにささやく。
「なんというか、完全に向こうのペースだな」
エリィは苦笑しつつ、ランディに同意した。
ロイドたちがソファに座って少し経つと、トレイにコーヒーカップを五つ乗せ、男が戻ってきた。手慣れた手つきで各自の前にコーヒーを置き、テーブルの真ん中にミルクピッチャーと砂糖が入ったポットを置くと、ソファにどっかと腰掛ける。
「ミルクと砂糖はお好みでどうぞ。お嬢さん方には、少し苦いかもしれないが」
ありがとうございます、と微笑むエリィ。ティオは、どうも、とだけ言って、さっそく砂糖をポットから自分のコーヒーに入れていた。
男は胸元のポケットから名刺入れを出しつつ、ロイドに向かって言った。
「あらためて自己紹介といこう。私の名は、イアン・グリムウッド。この法律事務所で弁護士

をしている」
　イアンから差し出された名刺を受け取りつつ、ロイドが答える。
「ロイドです。こっちから順にエリィ・マクダエル、ティオ・プラトー、ランディ・オルランド」
　ロイドは言いながら、各自を指し示す。
「はじめまして」
「どうも」
「こんちはっス」
　それぞれ個性的な挨拶を聞いて、イアンはニコニコと笑っていた。
「君たちは見たところ、クロスベル警察の人らしいが？」
「はい。できたばかりなのでご存じないかもしれませんが、俺たちは特務支援課というセクションです」
「あぁ、なるほど……君たちがセルゲイ君の言ってた新人か」
　イアンは片方の眉だけを器用にあげた。どうやら軽く驚いた時のクセらしい。
　セルゲイの話どおり、すでにイアンは支援課のことを知っていたようだった。
「そういえば最新のクロスベルタイムズも読んだよ。着任早々、なかなか頑張ってるみたいじゃないか」

　グレイスが書いたクロスベルタイムズの記事は、イアンにも読まれていたらしい。ロイドが苦笑しながら答える。
「何だか散々なことを書かれちゃってますけど……」
　ロイドたち特務支援課の初仕事は、グレイスによってさんざんな書かれようをしていた。多少過剰な表現があったとはいえ、大半は事実なので反論もできない。
「なあに、あそこは昔からあんな調子だ。気にすることはない。彼らも認めざるを得ないよう、大活躍すればいいだけのことだ」
　そう言って笑いながら、コーヒーをひと口飲む。イアンのおおらかな話しぶりに、自然とロイドの顔もほころんだ。イアンは、そんなロイドの顔を見ながら、しみじみとつぶやいた。
「しかしそうか……あのガイ君の弟さんが警察に。何だかこう、空の女神（エイドス）の巡り合わせを感じるねぇ……」
　そうして、ひとりうなずく。
「あの……先生は兄とはどういう？」
「ああ、今の君たちと同じくたまに情報交換に来てくれたんだ。もっとも、彼は非常に優秀な捜査官だったからね。私の方が色々と助けてもらった」
　ロイドはうなずきながら、ここでも兄の背中を見ることになるのか、と内心つぶやいていた。

兄が優秀なのは誇れることだし、我がことのようにうれしく感じることもある。だが、時として重荷となることがあるのも事実だった。

と、エリィが軽く驚いた様子でロイドに問いかける。

「ロイド……あなた、捜査官のお兄さんがいるの？」

「なんだよ、水臭ぇな。そんなことひと言も聞いてないぜ？」

エリィと同じく、ランディも驚いた様子だ。ティオは黙ったまま、ミルクと砂糖がたっぷり入ったコーヒーをすすっているが、その目はロイドをじーっと見つめていた。

ロイドは彼らに兄のことを話していなかったことに気づき、詫びた。

「はは、ゴメン。つい言いそびれててさ。それに……もう亡くなった人だから」

できるだけさらりと言ったつもりだった。だが、エリィの顔には、先程とは違う驚きが広がる。

「あ……」

「仕事中に殉職したんだ。ちょうど三年前になるかな」

エリィはなんと言っていいのか分からず、口ごもってしまう。代わりに、ランディが話を受けた。

「三年前……そうか、それでおまえ、しばらくこの街を離れて……」

ああ、とロイドはうなずいた。ロイドは親戚の家に身を寄せ、捜査官を目指すべくクロスベ

ル警察学校に入校したのだ。エリィが肩を落とし、伏し目がちに謝った。

「ごめんなさい、ロイド。その……」

エリィにこれ以上気を遣わせないよう、あくまでいつもの調子で返す。

「いいんだ。言ってなかった俺のせいだから」

だが、一度重くなってしまった空気は、なかなか戻るものではない。イアンが手にしていたマグカップをテーブルに置く音がやけに響いた。

「……ガイ君のことは残念だった。私も個人的に、あの事件のことは調べてみたこともあったが……。残念ながら、手がかりすら見つかっていない状況でね……」

イアンのその言葉を聞き、ロイドの胸がチクリと痛む。生前の兄を知り、この街の情報にも通じているというイアン弁護士なら、兄が死んだ事件について、なんらかの情報を持っているのではないかと思っていたからだ。しかし、その望みはあっけなく散ってしまった。

だが、今はそのことを悲しんでいる時ではない。ロイドは頭を切り換えた。

「――いや。今は兄のことはいいんです。それよりも先生。今日ここに来たのは、お聞きしたいことがあるからなんです」

「ああ、なんでも聞いてくれたまえ。話せる範囲でだが、協力しよう」

イアンの返答を聞き、ロイドは単刀直入に問いかけた。

『ルバーチェ』について、何かご存知のことがあれば聞かせていただけませんか？」
イアンは片方の眉だけを上げた。そのまま軽く思案するように、あご髭を手で撫でる。
「ふむ……『ルバーチェ』か」
それは、新人であるロイドたちにどこまで話すべきなのか、考えているようだった。
「……彼らにまつわる黒い噂は多い。帝国と共和国にまたがる密貿易。盗品売買に、ミラ・ロンダリング。猟兵団の斡旋や武器の密売まで……。そのどれもが、クロスベルの特殊性を利用したものと言えるだろう」
「クロスベルの特殊性……？」
ロイドの問いかけに、エリィが答えた。
「近年ますます盛んになっている貿易業と金融業の発展……それと反比例するかのように脆弱きわまる政治基盤ですね？」
イアンは大きくうなずく。エリィは市長の娘として。イアンは街の弁護士として。立場は違えど、政治状況に関する憂いは共通するものがあった。
「このクロスベル自治州の政治基盤は極めて弱い。多くの政治家は、帝国派か共和国派のどちらかに属しており、利権をむさぼる者が多いんだ」
イアンは一気に言い切ると、コーヒーをひと口すする。苦い顔をしたのは、冷めかけのコーヒーのせいだけではないのだろう。
「そして、マフィアの暗躍を取り締まる法案が出されたとしても……彼らと癒着した議員に潰される」
その言葉に、まさか、といった表情でランディが問いかけた。
「なんだそりゃ……本当なのか？」
エリィが沈痛な面持ちで答える。
「……残念だけど、本当よ。ルバーチェの利権とつながっている議員は相当多いと言われているわ。おそらく、警察が動けないのもそれが最大の理由でしょうね」
「……大人の事情、ですか」
それまで黙ってコーヒーを飲んでいたティオが、ため息と共につぶやく。大人の事情というものに振り回されてきた彼女なりに、思うところがあったのだろう。
「それではルバーチェは実質上、犯罪を起こし放題なんですか？」
ティオに尋ねられたイアンは、かぶりを振ってそれに答えた。
「いや、さすがにそれはない。あからさまな犯罪を放置すれば市民や周辺諸国も騒ぐだろうし……今のところは『市民生活に直接迷惑はかけない』という一線だけは、ルバーチェ側も守っているようだ」

そこまで言うと、イアンはソファに身体をあずけて、少し疲れた様子で言った。
「逆に、その一線を越えなければ何をやっても警察は動かない……そう高を括っているところもあるみたいだがね」
その言葉に、ロイドは絶句してしまう。ランディは、何かを得心した様子でうなずいていた。
「なるほどなぁ。活気ある華やかな都市の裏側に、魑魅魍魎（ちみもうりょう）のうごめく影アリか」
「……機密レベルの高い情報をチェックしておきたいですね……」
ティオはティオで、やる気になっているようだった。相手がルールに則らないとするならば、こちらも多少逸脱しても、情報を手に入れようと考えている様子だ。
イアンはソファに身体をあずけたまま、話を続ける。
「まあ、ルバーチェの基礎知識は大体そんなところだが……」
よっと、という声と共に身体を起こし、ロイドたちの方に身を乗り出して言った。
「——しかし、ここ最近、少し風向きが変わってきていてね」
イアンの口ぶりから、何かあると察したエリィが続きを促す。
「どういうことですか？」
「これはまだ、警察の方でも掴んだばかりの情報らしいが……最近、どうやらルバーチェの対抗勢力が現れたらしいんだ。それもかなり強力な、ね」

マフィアに対抗しうる勢力となると、相応の実力と規模のある組織だ。ロイドがまっさきに思いついたのは、遊撃士協会だった。だが、それを口にすると、イアンは首を横に振った。
「対抗勢力といっても悪い意味でだよ。カルバード共和国の東方人街に一大勢力を構えている組織……というか、マフィアだね。それが、このクロスベルに進出し始めているらしいんだ」
別のマフィアが、このクロスベルに現れた。そのショッキングな情報を聞いて、ロイドは思わず腰を浮かせた。
「なっ……！」
「ほ、本当ですか!?」
ロイドと同様にエリィも驚く。イアンは深くうなずき、腕組みをした。
「以前からそんな噂はあったが、どうやら事実だったらしい。——組織の名は、『黒月（ヘイユエ）』。そしてつい半年前、クロスベルの港湾区にできたのが『黒月貿易公司』という」
「『黒月』……」
ロイドのつぶやきに、ティオが素直な感想を言う。
「……いかにも東方風の名前ですね」
ランディが軽く肩をすくめながら、ぼやきのように話す。
「しかしマフィア同士の抗争か……。こりゃ、不良同士のケンカどころの騒ぎじゃないぜ」

飄々とした語り口が信条のランディも、調子が出ないようだ。
イアンは腕組みしていた右手をほどき、そのままあご髭を撫でた。
「幸いにしてというべきか……まだ、その抗争そのものは表立っては始まっていないらしい。しかし近いうちに何らかの形で暗闘が始まるかもしれない……。警察の捜査一課などはそれを警戒しているようでね」
捜査一課、という単語を聞き、ロイドは驚いた。ここに来てから、驚きの連続だと我ながら思う。エリィは、少し考え込むようなそぶりを見せてから、イアンに尋ねた。
「もしかして、先ほどこちらを訪ねていた眼鏡の男性は……？」
「ああ、捜査一課に所属するダドリー君という捜査官だ。ちょうど、今話している事と同じような話をしに来たのさ」
「そうだったんですか……」
エリィの言葉を聞きながら、ロイドは考えにふけっていた。イアンの話は驚きの連続だが、それはすなわち新情報が多く手に入ったということだ。そして、それらの『新しいピース』が、綺麗にはまる推理が組み立てられそうだ、という予感があった。
「ロイドさん……？　どうしたんですか？　そんな難しそうな顔をして……」
ティオに声をかけられ、ようやく我に返った。ロイドの様子を見て、ランディも何かを察したようだった。
「ひょっとして、何か気づいた事でもあるのか？」
「ああ……まだ完全にはまとまってはいないけどね」
そう言いながらロイドは、一刻も早くこの推理を組み立てたい思いに駆り立てられた。こういう時は、ひらめきが消える前に、アウトプットした方がよい。警察学校での授業での経験などから、ロイドはそう思った。そうと決まれば話は早い。ロイドはソファから立ち上がった。
「――先生。ありがとうございました。先生の情報のおかげで解決の糸口が見えた気がします」
そう言って、頭を下げる。仲間たちも立ち上がった。
「そうか……それは何よりだ」
イアンも立ち上がり、ロイドたち支援課のメンバーを見回した。
「セルゲイ君には世話になっているし君たちの事は個人的に応援している。また何かあったらいつでも訪ねてきてくれたまえ」
「はい、ありがとうございます。それでは、失礼します」
「ありがとうございました、先生」
「コーヒー、ごちそうさまでした」
「どもっした」

各人、思い思いの挨拶をして、事務所を出ていく。彼らがドアを閉めた後。イアンはドアの向こうに消えたロイドの背中を思い出していた。
「……そうか、ガイ君の弟さんか……」
ふう、と小さなため息をひとつつき、カップに残っていたコーヒーを飲み干した。

支援課が入っているビルの一階は、主に共用スペースとして使われていた。玄関から見てステップフロアとなっている少し小高いフロアには、長机がある。年代物らしく傷は多いが、しっかりとした作りでガタつきひとつない。ここでメンバーは食事を取ったり、他愛もない雑談に花を咲かせたりする。しかし今は、捜査のための重要な会議が行われていた。
ロイドが、長机の近くに置かれたホワイトボードの前に立っている。ホワイトボードには旧市街の地図が貼られ、今回の事件に関わっているであろう人の名前、その所属などをロイドが手早く書いていた。これから、サーベルバイパーとテスタメンツの抗争に関する事件についての捜査会議を行おうとしているのだ。
ホワイトボードに一通り書いたロイドが、長机の方を見る。そこには、エリィ、ティオ、ランディが座っていた。エリィとティオは姿勢よくイスに座っているが、ランディは背もたれに身体を預け、足を組んでいる。みな、ロイドの次の言葉を待っていた。

「発端は五日前の真夜中。『サーベルバイパー』と『テスタメンツ』のメンバーがそれぞれ何者かに襲われた」
ロイドは事件の概要を説明した。簡潔な言葉で要点をまとめる。警察学校で最初にたたき込まれる、捜査会議での説明方法だ。
「場所は、旧市街の別の二箇所。ここと、ここになる」
言いながら、ホワイトボードに貼られた地図に赤い×印をつけていく。ペンが走る音がする中、みなロイドの説明を真剣に聞いていた。
エリィがホワイトボードの地図を指差しながら言う。
「西の裏通りで『テスタメンツ』のメンバーが襲われ……」
そのまま指を、もうひとつの×印の方へと向かわせる。エリィが言葉を発する前に、ランディが口を開いた。
「で、東のライブハウス前で『サーベルバイパー』のヤツが襲われたってことだな」
そう言って、背もたれにわずかに身体を預け、イスを揺らす。ティオはじっと地図を見つめていたが、少しだけ目が見開かれる。何かに気づいたようだった。
「……こうして見ると、旧市街の反対側同士ですね」
ティオの言葉にロイドがうなずく。

「ああ、同じ夜に起きても、すぐには判らなかったはずだ」
両方の×印を指し示しながら、事件に関する仮説をひとつ積み重ねる。
「ある程度の時間が経ってはじめて、闇討ちがお互いの仕業だと確信して現在に至る、というところかな」
そこまで言ってからロイドは腕を組み、黙った。みなの意見を聞こうというつもりらしい。
「うーん……やっぱり、第三者がいたとしか思えねえぜ」
そう発言したのはランディだった。両手を頭の後ろで組み、ホワイトボードを難しい顔でにらみつける。考え事をするときのクセのようだった。
「どっちかのメンバーの全員が口裏を合わせない限り、どっちの犯行も不可能だろう?」
ランディは、サーベルバイパー、テスタメンツ、両方の犯行の可能性を否定した。今回の事件は、サーベルバイパーかテスタメンツ、どちらかのメンバー全員が結託すれば、『演出』することは可能だ。だが、その場合、自分の仲間を自分たちの手で病院送りにする必要がある。ケンカっ早い彼らが相手を攻撃する時に『仲間がやられた』という大義名分を必要とするとも思えないし、なにより大事な仲間を自分たちの手で痛めつけることをするとは思えないのだ。
「ランディの言うとおりだ。この段階で、ふたつの犯行を第三者の仕業だと仮定してしまっても構わないと思う」

「そうね……少しずつ可能性を絞らないと前に進めないし」
エリィはあごに手を添えて、ややうつむいたましゃべった。慎重に考えながら、ランディとロイドの仮定に同意する。そして、顔をあげてロイドの方を見やった。
「――で、その第三者として上がってきた名前があるわけね」
ああ、と言いながらロイドがうなずく。その表情が一段と引き締まった。いよいよここから、事件の核心に迫っていくところだからだ。
『ルバーチェ商会』――クロスベルの裏社会を支配しているというマフィアだ。グレイスさんの情報によれば半月ほど前、その構成員が旧市街で目撃されている。この情報自体の真偽を確かめている時間はないけど……まずは『ルバーチェ』が二件の傷害事件を起こしたという仮定で話を進めてみよう」
ロイドは一気に説明をし、みなを見回す。さっきと同じ、意見が出てくるまで待とうというポーズだ。するとティオがぽつりとつぶやいた。
「……そうなると……やはり問題は『動機』ですか」
ティオの言葉に、ランディが答える。
「うーん、動機ねぇ……利害の絡みそうにないマフィアと二組の不良集団か……」
そう言って、天井を見上げる。そこに何か良いアイデアが書かれているのか、と思わせるほ

ど、じっと見つめていたが、当然のように何も書かれていなかった。
　考え込むティオとランディを見つめ、エリィが言った。
「それら三つの『点』を結ぶ『線』があるはず」
　この線を見つけることが、今回の事件を解く鍵となる。そう結論づける。
「不良連中もマフィアも、メンツをつぶされれば怒り狂って動く、って線で考えてみたんだが……マフィアに関しちゃ、メンツどころか表だってもねぇ。つながらねぇな」
　ランディの言葉に、エリィもうなずく。
「ランディの言うとおりだわ。マフィアは必要がない限りは示威行為には出ず、影に潜み機会を窺うもの。現に、グレイスさんが見た時も、自分たちの正体が分からないように行動していたみたいだし」
　そして彼女は、そのまま視線をロイドに移した。
「――ねえロイド、見当はついているのでしょう?」
　えっ、とティオとランディは軽く驚き、ロイドの方を見る。ロイドは少し照れくさそうに頬をかく。エリィの考えは当たっているようだった。ロイドは、まだ確証があるわけじゃないけど、と前置きをし、表情を引き締めて言った。
「三つの『点』を結ぶ『線』、俺は《黒月》だと思う」

「あのヒゲ先生が教えてくれた情報だな」
　ランディがすかさず補足を入れる。面白くなってきた、と言わんばかりにテーブルに肘をつき、身を乗り出す。
「確かに、可能性としてはいちばんありそうな気がするけど……。でも、そうだとしたら、どんな線になるのかしら」
　再びあごに手を添え、エリィが考えつつしゃべる。その眉根は寄せられ、彼女が深く考えているのが外から見ても分かる。
　少しの間、一同が無言になる。訪れた静寂があたりを包む。と、その時ティオがしゃべり出した。
「点と点を結ぶ線は、どうして結ばれるのでしょう?」
　ティオの発言に、誰も返答できなかった。質問の意味が分からなかったらしい。
「導力ネットワークが結ばれるのは、端末からサーバーにアクセスするためです。端末という点と、サーバーという点を、ネットワークという線で結ぶ。それによって、情報を引き出せるようになります」
　エリィがあごに手を添えたまま、つぶやいた。
「つまり、情報を引き出すという目的があるから、線をつなぐ……。なら、ルバーチェがサーベルバイパーやテスタメンツとつながる目的を考えればいい、というわけね」

「そのとおりです。目的……もっと大きく『必然性』とでもいいましょうか。黒月が関係することで、ルバーチェと不良グループがつながる『必然性』、それが見えれば、あるいは」
事件解決の糸口が見えるかもしれない。エリィとランディは、うなずいた。
「パッと思いつくのは、黒月が来たことで、手を組もうぜーって話だが……マフィアと不良グループが手を組むなんてこと、まずないんじゃねーか？」
ランディの言葉に、エリィも同意する。
「さっきランディが言ったとおり、マフィアも不良グループもメンツを重要視するわ。共闘する場合は、お互いが同格だと認識しない限り無理よね」
その時、ティオがキョトンとした顔で尋ねた。
「あの……因子の関係性が双方向ではなくて、片方向だけ、ということはありませんか？」
「おいおいティオ、また専門用語か？」
ティオの難しい言い回しに、ランディが悲鳴を上げる。ティオはジト目をランディに向けた。
「……では、ランディさんのためにマスターとスレーブとでも言い換えましょうか」
「……おまえ、わざと分かりにくい言葉選んでないか？」
ランディ、とエリィが茶々をたしなめる。そのまま、ティオに続きを促した。
「ティオちゃん、それって？」

「つまり、両方にではなく、片方が一方的に利益を得られるなら、つながりができるのではないか……ということです」
その時、目を閉じてじっと考えこんでいたロイドが、急に目を見開いた。そうか、とつぶやき、何度かうなずく。自分で自分の考えを整理し、穴がないことを確認していた。
「なんか閃いたか？」
「『必然性』の話だよ。それから、『一方的な利益』も」
ランディの問いにロイドは答える。
「《黒月》のクロスベル進出を受けて、ルバーチェ側がする事といえば何だ？」
ロイドはみなに問いかけた。問いはとてもシンプルで、みなが考えるとっかかりとして分かりやすい。
「そりゃあ、単純に考えれば戦力増強だろ」
最初にランディが答えた。
「兵隊の増強と武装の強化。どちらも欲しいところだよな」
人差し指と親指を出し、数を数えながら話をする。
ロイドは軽くうなずき、ランディの話を受ける形で続ける。
「マフィアなら、武装の強化は密貿易で確保できるだろう。……だが、戦闘員の方はどうだ？」

「そいつは……」
ランディは口を開きかけたが、そのまま押し黙ってしまう。マフィアの戦闘員ともなれば、ただ人を雇えばよいという話ではない。相応の腕前と覚悟が必要になる。
「普通に考えたら猟兵団を雇うところでしょうけど……ううん、駄目ね」
エリィはいったん口にした自分の意見を、自分で否定した。首を振り、あごに手を添えて思考する。
「クロスベルは色々な意味で周辺諸国から注目されすぎている。《不戦条約》の手前もあるし、猟兵団なんかを動かしたりしたら帝国と共和国が黙っていないわ。それは両者の意を受ける政治家や議員たちにも同じこと……」
クロスベルという土地を内外から見つめ続けてきたエリィの分析は的確で、ロイドは聞きながらうなずいていた。
「つまり……ある程度の実力があり、帝国も共和国も外交問題にしない、あるいはできないような人間が理想、ということですね」
「しかも、ひとりふたりじゃダメだぜ。マフィアが戦闘員として必要とするなら、ダース単位は欲しいところだろう」
ティオのまとめに、戦闘のプロであるランディが補足をする。

「でも、そんな都合のいい人間を、しかもまとめてだなんて……」
エリィのつぶやきは、途中で消えてしまう。そして、彼女の顔には驚愕の表情が浮かんでいた。
「──あ」
ティオとランディも気づいたようだ。ティオもまた驚きで目を見張り、ランディはイスから腰を浮かせた。
「ロイドさん、もしかして……」
「その兵隊候補として、不良どもをってことかよ⁉」
ランディの大きな声がフロアに響く。ランディは、ロイドに確認を求めるように見つめた。
「ああ……血の気が多く、しかも統率されている青年たち。この街で運用できる戦力としてはまさにうってつけだろう」
ロイドはランディたちの推測を肯定し、話を続ける。
「しかし、どちらのグループにも目障りな存在がいるとしたら……？」
「なるほど……あのワジ君は、間違ってもマフィアに協力しそうにないし」
「あのヴァルドさんもお山の大将でいたいタイプ……とてもマフィアの下で働きそうにはありませんね」
「そこで、お互いを潰し合わせて弱体化させた頃合いを見計らって、一気に取り込みにかかる

「……なるほど、そういう筋書きかよ！」
ロイドの言葉を受け、エリィとティオとランディが発言する。そのテンポは小気味よく、まるで何かの演奏のようだった。
「あくまで可能性のひとつさ。現時点である情報をひとつずつ組み立てた場合のね」
盛り上がる三人を前にし、ロイドがさらりと言う。一度冷静になり、自分たちが視野狭窄に陥ってないかを確認するかのようだった。
しかしランディはすっかり盛り上がり、ロイドの元へ歩いていって、その肩を勢いよく叩いた。
「またまた〜！　謙遜するなってーの！」
痛いってば、と言うロイド。しかしその表情には微笑みが浮かんでいる。
その微笑みにつられて、エリィも笑顔で言った。
「うん、私もかなり的を射ていると思うわ。推理にも無理がないし、状況的な説得力もあるもの」
「……伊達に捜査官の資格を持ってはいませんね」
そう言って目を閉じ、ティオが微笑む。
三人から褒められ、ロイドは頭をかいた。少々照れくささを感じていたようだ。
「はは……ありがとう。——それで、さ」
ロイドの次の言葉に、みなが意識を傾ける。

「この推理……あのふたりにも伝えた方がいいと思わないか？」
エリィたちは、またも驚きの表情になる。
「あのふたりって……」
「おいおい、まさか……」
ロイドは、ホワイトボードに書かれた文字を指差しながら言った。
「ヴァルド・ヴァレスに、ワジ・ヘミスフィア。『サーベルバイパー』と『テスタメンツ』のヘッドたちさ」
駅前通りは夜になると、人影もまばらになる。夜の闇に浮かぶ巨大なクロスベル駅は不気味な迫力があり、用事もなくここを訪れる者はほとんどいない。共和国方面行きの最終列車がけたたましい音を立てて出発すると、あたりは静寂に包まれた。
ロイドたちは人気がいなくなる頃を見計らい、ワジとヴァルドをここ駅前通りの奥にある、資材置き場に呼び出した。ここなら、人目につくことはまずありえない。警察官と街の不良グループのヘッドが密会するには、うってつけの場所というわけだ。
支援課のメンバーが駅前に到着する直前、何者かの怒号が響き渡った。
まっさきにランディが反応する。
「おい、今の声は……」

「……サーベルバイパーのヘッドの人だと思います」
即座にセンサーモードに切り替えたティオが答える。ロイドは足を速め、みんなに言った。
「急いだ方が良さそうだ」
ロイドの声に従うように、エリィたちもスピードを速める。
彼らが駅前通りから横にそれる階段を駆け下り、資材置き場に到着した時には、すでにヴァルドとワジは来ていた。ヴァルドは背中に鎖を巻きつけた木刀を担ぎ、ワジに噛みつかんばかりの勢いで迫り、ワジはようやく到着したロイドたちを半笑いの表情で眺めている。一触即発、という雰囲気だった。
「てめえら……」
ヴァルドのイラついた声をさらりと受け流し、ロイドが詫びる。
「すまない、ふたりとも。待たせてしまったみたいだな」
ワジはロイドの方に向き直り、うやうやしく一礼をする。右手を胸の前に添え、まるで役者のようだ。
「お招きにあずかり光栄至極――」
そこまで言って、顔を上げてニヤリと笑う。
「約束どおり、さぞ面白い話を聞かせてくれるんだろうね？」



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 156

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/